



家族の憩いの場所(リビング・ダイニング)の中央部が吹き抜け。ブリッジでつながれた2階子供室と大層の定食は具体的に開いたり閉じたりしながら吹き抜けを介して、憩いの場所とつながる。たとえ開いていても、子どもたちの居場所を確かに伝えるしくみ。(岡氏)

久住 単に長持ちする家ではなく、家族の成長や変化を受け入れることのできる家が、すなわち長く暮らせる家なんですよね。誤解を恐れずに言えば、私自身は5年住宅、10年住宅という考え方があってもいいと思うけど。

編 無理しながら長く住むのではなく、生活の変化にも対応できる家がいいということですね。

岡 僕らの立場は「じゃ、それってどんな家なのよ」って疑問に解答しなきゃいけない。それをここんとこずつ考えていて、まず、度住まいの固定観念を捨ててみた。具体的に

子供部屋のある中2階踊り場より1階の食卓を見下ろす。吹き抜けのあるワンルーム空間は前ストープで覆われ、2階に上がった階段はファンで1階の足元から吹き出す。また、厚いコンクリートの壁はストープで覆われ、蓄熱層の役割を果たす。(岡氏)



暮らしそのものを楽しむという発想

編 幸せの基準というの、時代によって様変わりしているように思う。

よね、家ができた、長い長い付き合いになるんだから、そういう意味でも、僕は土地運びもかなり重要だと思えます。家族が生活していく上で、子育てに関わる教育環境面での立地など、長いスパンで見ると、家族にふさわしい場所と、それを運んでおかないと。

小西 僕の場合は、限られた土地で限られた予算で、という依頼がほとんどですから、厳しいと思われれる条件の中でも、住まう人がいつも新鮮さを失わない空間をつくりたいと思っています。

富田 例えば、住れり尽くせりの住まいが幸せか、というとは僕はそのような気がする。台所のスイッチでお風呂のお湯が沸いたり、全てリモコンで操作できたり。そういう利便性が当たり前になってきたけど、そういう暮らしにも違う良さもありはしないかと。例えば、スイッチの変わりに、お風呂は父親の役目だったり、共同生活としての個々の役割や、親子のコミュニケーションが育まれることも大事じゃないでしょうか。

小西 もっと突き詰めていくと、幸せの基準の前に、「家族のあり方」みたいな大きなテーマにぶつかりますよね。住宅の新しい考え方で、とどのつまりはこれからの日本人がどんな生活をしていくのか、つてことが大きく関わってくる。現実、家族構成だって昔と違って、人住まいが半数を超えてる。子どもが巣立つたり、高齢者が独り暮らししてたり。つまり、今しつかり建てた家に帰ると同じ家族構成で住んでいるのか、ということと自分が届いている。

には部屋という区切りではなく、家を空間として捉える。その中に、今必要な機能を果たすスペースを置いていく。ハードな区切りではなく、必要な時に融通の利く、ハイティーンなどでプライベートを緩やかに確保できるように、とかね。

久住 施主も工夫して、知恵を働かせて、考えながら住む。そういうことを楽しんでほしいですね。

富田 家をワンルーム空間にしてしまおうとするでしょ。すると、プライベートとパブリックとの垣根が曖昧になる。でも、やがて夫婦の居場所、子どもたちの遊び場がそこはかとなく決まってきたら、近づいたり離れたりしながらお互いの気遣いをする。それぞれが距離感のバランスをとっていく。思い切つてワンルームにしたなら、懐かしいような新しいような家族の空間ができそうですよね。

徳島の設計者4人に訊く

「これからの住まい これからの家族」



写真右から
小西英利氏
久住高弘氏
富田眞二氏
岡 健治氏

個の志向性が多様化し、家族そのもののスタイルも変容しつつある今、心から満足できるマイホームとは…。徳島で活躍中の4人の設計者が、住まいと家族のこれからを、本音でトーク。

家は、家族に幸せを運ぶもの

編 早速ですが、皆さんが住宅づくりで最も重視していることは何ですか。

久住 設計者という立場から言えば、まず依頼者との感性や価値観が合うかどうかです。これがすべてです。私を選んで訪ねてきてくれた方にも、そのへんを再確認していきます。家は一生に一度のものだし、そのパートナーを簡単に決めない方がいいですよ、ってアドバイスします。

編 本誌でもたくさんのお施主様取材してきましたが、能かに依頼先の決定は大きなポイントとなっているようです。

富田 徐々に増えたとはいえ、そもそも設計事務所を訪ねてくる施主さんが少ないです。全国平均でも3%くらいだと思いますよ。だから年間の軒数はそれほど多くはない。それでも長年の間に、たくさんのお施主に会い合ってきたことができた。仕事を始めてから僕がずっと大事にしてきたのは、やはり「幸せになつてもらえる家づくり」です。その家族にとって家はゴールではなく、あくまで幸せになるための出発点であるべきだと思っています。

久住 そうそう。家は建てるのが目的ではなく、その家で住むことが目的でなくてはならないはず。多分、勘違いされている方が多いと思います。

岡 要は「住みこなす術」というのが、施主側の課題です。

- Panelist**
- 久住 高弘氏
 - 小西 英利氏
 - 富田 眞二氏
 - 岡 健治氏
- Coordinator**
- 住まいの徳島編集部(=文中「編」)

家づくりの目的、住むことが目的



富田 眞二氏 tomiichi tomita
富田建築設計室 代表
一級建築士
徳島市川内町小松東58-15 3F

③ 平屋部分がコの字になり、中庭を開んで生活するスタイル。中庭には竹藪の植栽を配置し、空間を演出。暮らしているうちに、季節の移り変わりとともに変化する様子を楽しめる。[久住氏]

④ 1階の食堂より座席を見る。居間中央に置かれた薪ストーブの煙突が現代版大黒柱で、この家の目玉である。1階にある洗面の扉は、ストーブの煙突階段によって、右隣の居間へとつながる。[富田氏]

⑤ 1階の親世帯(手前の露天スペース)と2階の子供世帯(2階バルコニーの奥)のまたがる生活スペースを、戸外のデッキスペースと2階バルコニーのデッキスペースで緩やかにつないでいる。[小西氏]



街がイキイキとしていけばやはり美しい。
富田 バラバラであっても、いい街並みは確かに存在していますよね。

久住 住まいで例えると、なにもかも収納してしまおうとしてもあれば、雑然と片づいてないけどゆるやかな風景、というかなかなか見せ方ができる人もいます。片づいてはいないけど心地良い、というのも住まい方の達人ですね。

家は建てることだけが目的ではなく、住むことが目的

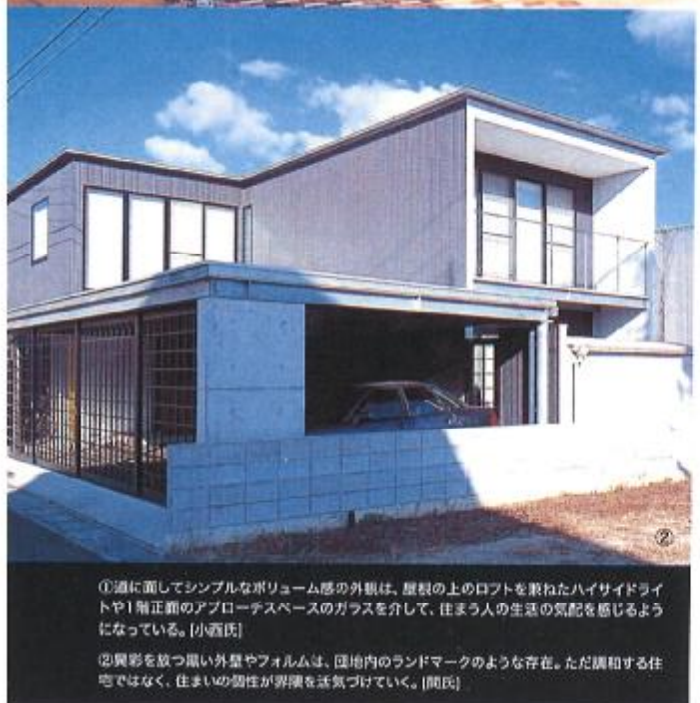
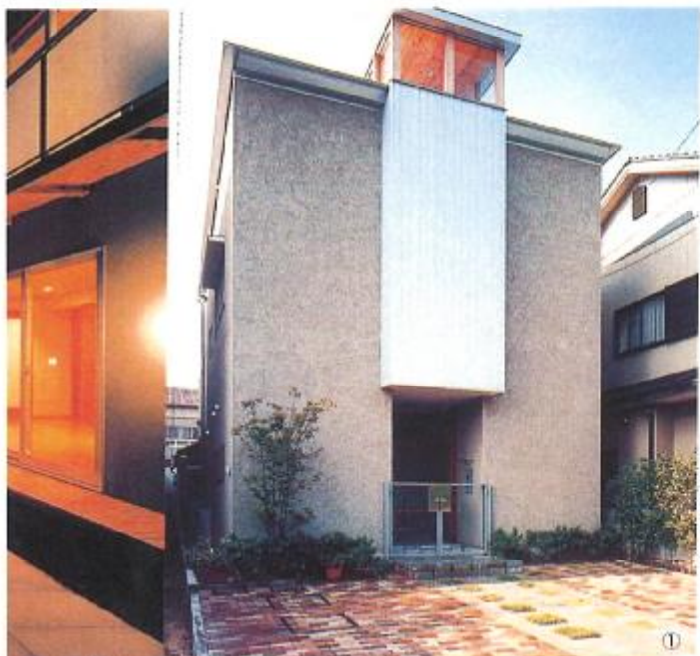


久住 高弘氏 takahiro kusumi
(株)久住建築設計事務所 代表
一級建築士
徳島市撫賀町黒崎字松島134

意識しながら暮らすこと

編 これから、というテーマでいうと21世紀は「環境問題」も住まいづくりのキーワードになりますね。

富田 日本はもともと順で自分の敷地をしっかりと開けてしまっていて、街や隣家とのつながりを知らず知らずのうちに遮断してきた。環境問題って実は、そういうプライバシーの確



① ①に置いたシンプルなボリュームの外観は、屋根の上のロフトを兼ねたハイサイドライトや1階正面のアプローチスペースのガラスを介して、住まう人の生活の気配を感じるようになっていく。[小西氏]

② ②の異彩を放つ黒い外壁やフォルムは、国内のランドマークのような存在。ただ調和する住宅ではなく、住まいの個性が街並みを活気づけていく。[富田氏]

保にも起因して、社会とのつながりを意識していないところが影響しているように思う。

富田 乱暴な言い方をすれば、僕らは所詮人類中心の発想をしがち。ならもっとストリートに、自分環境を考へる。自分を取り巻く環境への配慮というか、隣家への配慮といった身近なレベルでのモラルがベースになるんじゃないかな。

久住 極端ですが、中国の人が全部マイカーを手に入れたら大変ですよ。我々が手に入れたものを「我慢してください」とは言いにくいでしょ。だから、利便性を追求しながら環境にもやさしい暮らし、という考え方をそのものに少し無理が出てきたんじゃないですか。

編 けれど、今携帯電話を手放す勇気はありませんよね。一度手に入れた利便性を手放すには覚悟がいる。

富田 省エネも、要は設備に頼った上での発想です。まあ、そうじゃなくて、季節のいいときは窓を開ける。風を通す。

住まう人がいつも新鮮さを失わない空間づくりを。



小西 英利氏 hidetoshi konishi
小西英利建築設計室 代表
一級建築士
徳島市大塚2-38-1 岡本ビル

寒いときは厚着しろ、とまでは言わないにしても、そういう考え方を少し取り戻す時期なのかも知れない。

久住 ます、みんなが意識することですね。少しずつ歯止めをかけていかないと。

富田 さっきの住まいの固定観念と共通しますが、回機能とか設備とかをゼロから発想してみてもどうでしょう。最低限の水回りだけは備えて、僕らは得らしてあげる器、空間だけを提示する。それから施主が必要なものを選んで付け加えていく。突き放した言い方ですけど、家を幸せな場所にするって、やっぱり施主の住みこなし方じゃないかと思う。

街並みと住宅の関係性についてはいかがですか。

小西 街並みの約束事は守りましたが、つてももの集合だけではダメだと思う。ただ、されていくだけじゃ、本当に美しい景観なのかどうか。

富田 単に違和感なく並ぶのが理想的かというところを決してそうではない。例えば日相佐に80年前のコンクリートの建物がポツンとあって、そりゃ思い切り異質ですよ。けれど町の人からは、「ハイカラ」だと思って親しまれてきた。ずっと昔からそれは町のアクセントだった。同じものが並んでる街並みが素敵じゃないかって、その建物が人々に好感を持たれているかどうかが問われるんじゃないかな。

富田 アジア諸国のごちやごちやした雑踏には、どこか懐かしさとエネルギーを感じる。街並みがどうこういうより、

感じる家へ

小西 僕は、施主が以前どんな暮らし方をしていたのか見に行くことがある。使い慣れた家具の計画も兼ねて、すると、取柄の仕方や価値観が凄然と分かるから。

編 最後にこれからの住まいが向かう、新たな方向があれば教えてください。

富田 限られた土地を効率的に使うだけでなく、気の合う仲間と共有する。都市のまん中とか、魅力ある環境に住んで、しかも好みのスペースづくりができる。「コトボラティブハウス」がもっと、一般的になってくるんじゃないかな。

富田 取柄も間取りも確かに大事。だけど、家において隙子感に木の葉が落ちるのを見て季節の移ろいを感じたり、雨音にやすらぎを感じたり、住まいという空間の中に、どうやって情緒を取り入れていくか、これは僕自身の課題ですけど、冒頭で「幸せ」という言葉を使いましたが、要するに家は家族にとって精神的なよりどころであるべきだと思いませんか。

小西 年月を経ても魅力のある家って、施主の関心が色褪せない家。つまり、いつも何かを感じさせてくれる空間なんじゃないでしょうか。

編 みなさん長時間ありがとうございます。(文中敬称略)

部屋の集合ではなく、ひとつの空間として広げる。



稲 健治氏 kenji inazuma
同健治建築工房 代表
一級建築士
徳島市中船和町2丁目75 岡本ビル4F